

## 宮柗二のふるさと詠

中村 仁彦

「ふるさととは遠きにありて思ふもの、そして悲しくうたふもの」(室生犀星「小景異情―その二」)は「ふるさと」の本質を言い表している。ふるさとは「生まれ育った場所であり、自分が生まれた場所から移動し、移動した地域で振り返り見る元いた場所」(「最近百年間の「ふるさと」の語られ方」重岡徹、農村計画学会誌二〇一二年一月)とされる。生まれ育った場所であるだけではなく、そこから別の場所に移り住むことによって「ふるさと」が意識化される。

宮柗二は新潟県の堀之内村に生まれ、二十歳の時に家業を捨てて上京。それ以降堀之内で暮らすことはなかった。柗二の父も二年後に家族を伴い横浜に移るので、帰るべき実家もなくなっていた。しかし、家業であった本屋は柗二の従弟市川健四郎に引き継がれ、丸末書店は現在も元の場所で営業を続けている。従弟との関係は良好であったので、柗二はたびたび堀之内を訪ね元の実家だった家に泊めてもらっており、生涯にわたって堀之内との関係は切れなかった。その堀之内を柗二は短歌にどのように詠んできたのであろうか。

柗二は随筆の中で堀之内に触れ、「私の郷里の町は、越後の雪深い山中の魚野川という川のほとりにある。」(「ふるさ

との歳越し」昭和四四年)などと、様々にふるさとを記述している。短歌にも故郷のことをたびたび詠んでおり、故郷に關係する「雪深い」、「山中」、「魚野川」や「墓処」「まつり」などに関する歌を拾うとかなりの数にのぼり整理がつかない。そこで「ふるさと」や故郷を意味する産土うぶくになどの言葉を直接詠み込んだ歌に注目してみると、五十首ほどになった(「ふるさと」には「郷国」、「故里」、「生まれ国」などを含めた。また一般的な意味で使われた故郷、ふるさとの歌は含めなかった)。柗二は年齢を重ねながらこの「ふるさと」をどのように詠んだのか、いくつかの項目に分けて整理論評する。柗二がふるさとを離れたのは、家業である丸末書店の将来に見切りをつけたからである。

ふるさとを流亡し来てわがうから三とせ隠

れし家もいまなし 『小紺珠』

ふるさとを自らすてて若き日に上京したり

き二十歳なりし 『緑金の森』

一首目は、(鶴見町六〇二の家)と小題のある一連の最後の歌である。この住所は英子氏と結婚した時に父が買いつけてくれた家のものだが、この家は一年ほどで家屋疎開のため

取り壊されている。またこの歌が詠まれた昭和二十一年か二十二年の夏ごろ（この歌の初出は不明であるが、一連は「七夕」の表題の中にあることと、『小紺珠』の作歌期間から推定した。）には、父母や兄弟は父が鶴見に確保した別の家に住んでいたもので、この家に「うから」で住んだことはない。この意味で不明点のある歌である。丸末書店を譲渡して横浜鶴見に家を購入し新しい生活をはじめたが、それも順調ではなかったことを詠んでいるのだろう。この歌に使われている「流亡」は、定住の地がなくさすらい歩くこととある。終二が白秋の許を去るとき「長子の責任」を盾に取ったのは、一家が流亡していると思っていたことと無関係ではないと思われる。

二首目は昭和五年一月号『短歌』に「越後堀之内」として発表された五首の内の一。六十四歳で脳梗塞を併発し体の自由が利かない中で、ふるさとの若き日を回想している歌である。「自らすてて」は、当時の家業の衰退やI子との結婚に反対する周囲の動きという苦しい状況の中で、自ら決断したことを詠んでいる。六十代後半になって、手足や発音の不自由を抱える中でこの気持ちを表明するのは、生涯その決意を後悔していないことを示しているだろう。

終二は父保治と母を高井戸の自宅で妻の母親とともに引き取り、父のために建てた三鷹の家に転居し、そこで父を亡くした。その父を堀之内の宮家の墓処に納め、たびたび墓参り

をしている。

ふるさとの石の唐櫃からとに白骨しらほねの父を納めて青き梅雨つゆ來ぬ

ふるさとに残る墓処はかどを訪ひくれば鳴き響よびみを  
をり山の郭公  
『藤棚の下の小室』

今日もかも八十八夜ふるさとに父の墓処も  
古りてかをらむ  
『忘瓦亭の歌』

終二の父は終二が四七歳の昭和三四年三月に亡くなり、終二によって同年四月に堀之内の墓に埋葬されている。一首目はその埋骨の様子を詠んだ歌。五年後に（分骨ぶんこつを家に遺のこしてこの墓に納めし父の白骨しらほねもあはれ）（『藤棚の下の小室』）と詠むように、分骨を三鷹の家に置いて父のふるさともある堀之内の墓に骨を納めたのである。この墓処は付属していた林泉が上越線の工事で崩されるまでは静かな場所であった。少年時代にたびたびひとりここに来て、昼寝をしたり瞑想にふけったりした場所でもある（「遠い記憶」昭和四四年）。終二が六四歳の時に詠んだ（朝々を池岸に往きくれなるの蓮の花を見き小学生なりき）（『忘瓦亭の歌』）はこの時の思い出を詠んだのであろう。

終二の父はわずかに所有していた田などは売却したものの、この墓地だけは手放さず生涯守り続け終二に渡した。二首目は新潟市での文化講演会等に出席したあと、魚野川の堀之内の築場に泊まり、鮎の築漁の様子を見たあとに墓を訪ねたときに詠んだと思われる。仕事を辞めて時間的な余裕ができ、歌一筋の生活を始めた充実感と落着きが感じられる。三首目は東京にいて父の墓を詠んでいる歌。父への思いにあわせて八十八夜の行事が思い起こされている。亡父への思いはふるさとへの思いにつながるのだろう。

ふるさとへの思いは、季節ごとの祭りやその舞台となった八幡さまへつながり、齢を取るにつれて次第に深まっていく。

足もとの埃しきりに匂ひだつ今宵ふるさと  
は靈祭るらむ 【小紺珠】

ふるさとの盆の祭に離りつつ今宵酒飲む孤  
りを見るな 【晩夏】

ふるさとの鎮守の森をめぐり鳴く五月水田  
の夜蛙の声 【藤棚の下の小室】

枝先に五色の小鳩とまらせて豊年をまつわ  
がふるさとは 【白秋陶像】

再入院の一ヶ月となりふるさとは豊年鳩の  
まつりもすぎむ

一首目、二首目はお盆を、四首目、五首目は二月十五日の八幡さまの鳩の祭りを詠んでいる。いずれも参加しているのではなく思い出として詠んだ歌である。堀之内の盆踊りは「大の阪」という国の無形民俗文化財の選定を受けている盛大なものである。また九月十四日から十六日にかけての八幡宮祭礼として「踊り屋台」が町中をお囃子とともに練り歩く。いずれも堀之内が縮織の産地、集積地として栄えていた頃に京都から伝わったと言われ雅で盛大なものである。しかし、歌集にはこの二つの祭りを直接に詠んだ歌が見当たらない。（大の阪に踊るをみなのうた声がとぎれぐに聞こえるなり）という歌があるが、『群鶏』以前の昭和四年の歌で、歌集には収録されていない。）その理由は分からないが、終二と屋台のお囃子との関係は深く、地元から頼まれて本名の宮

肇の名前で「堀之内小唄」を作詞し、魚野川河畔の公園に歌碑が建立され、今も歌い継がれている。

鳩のまつりは、現在では、極寒の二月十一日に八幡さまで新婚の男性に水をかける（雪中花水祝）という一風変わった行事の一つとして行われている。江戸時代から続く行事で袴・緋袴などの古式ゆかしい装束に身を包んだ人々の大行列がまちを練り歩くなど、極寒の中の華やかなものであるが、明治七年に廃止され昭和六十三年に復活したとある。終二の生きた時代には、枝先に付けられた色様々の米粉の鳩をかざる「鳩のまつり」として豊年を祈っていたのであろう。

いずれの祭りも三首目の鎮守の森である八幡さままで行われる。この歌は祭りが行われるとき以外の八幡さまの静かな様子を詠んでいる。水田を「こなた」とよませるのは良く開墾された田だからであるが、現在の八幡さまのめぐりには水田はない。この歌は色紙に書くほど終二が好んだ歌であるので、米どころとしても有名な魚沼の美しい水田と一緒にふるさととの鎮守の森が胸に刻まれていたのだろう。

終二の父が堀之内を離れたあとも、昭和二四年五月の「多磨」に「誰が手に渡りてゆくか父の惜む山峡の田も川副ひの田も」と詠んでいるように、まだいくらか田畑を持っていた。

魚野川決潰に荒れしふるさとの川添ひの田  
の囀取してみつ 【晩夏】

ふるさとの家も畑地も手放して父が呉れた  
る小さな金

ふるさとは雪のふぶきて僅かなるわが所有  
【多く夜の歌】

地も埋もるらむか

『藤棚の下の小室』

一首目は、父の所有していた田が魚野川の決潰のために荒れているのを、図面に書き起こしたことを詠んでいる。魚野川はときたま川水があばれた（「よるんがし」昭和五八年）。

昭和三年にもアイオン台風で魚野川が洪水を起こした記録があるので多分その時のことだろう。初出（「多磨」昭和二四年五月）では「決潰のため荒れはてし」だった二句三句が推敲されて「ふるさとの」が挿入されている。初出では荒れたのは自分の田だけだったが、推敲により決潰で荒れたふるさとのなかにある田という歌になった。二首目は父の療養のためもあって三鷹に家を新築した時の歌。この歌では父が金を呉れたとなっているが、父は貸したつもりだったようである（「三十万円」昭和三七年）。三首目は初出（「短歌研究」昭和四十年五月）の「ふるさとに雪は」や「わが土地」などに異同がある。一首目から十六年後にもまだ堀之内に所有地があったことが分かるが、その土地は昭和三四年三月に死去した父から相続したものであろう。

これまで歌の中に「ふるさと」等が含まれている歌を見ましたが、宮柵二のふるさとは（夢に立つ山紫水明雪しろき八海山と清き魚野川）（『純黄』）である。この雪や八海山や魚野川を直接詠みこんだ歌は本当に多い。これらの歌なしに宮柵二のふるさとをのべることはできないが、焦点を絞るためにふるさとと雪を併せて詠んだ歌を引用する。

雪ふぶくふるさとの夜の道往くに似るとおもへど入りゆかんとす  
『多く夜の歌』

空ひびき土ひびきして吹雪する寂しき国ぞ  
わが生れぐに  
『藤棚の下の小室』

豪雪のふるさと偲び見てをりぬ明日は止む  
とふ東京の雪  
『純黄』

一首目は「退社願出」と小題がある四首の二首目の歌。四首の最初に（様々に臆したためらひ弱きかな梅咲く下に立ちて偲べば）とあるので、「雪ふぶくふるさとの夜の道往く」思いは心細さを示している。二首目の歌は高野公彦氏が「宮柵二」（本阿弥書店）で指摘するように濁音が多く、重くてごつごつしている。（「荒び男の如く雁木を奔りゆく吹雪ぞ見ゆれ常のまぼろし」（『獨石馬』）と合わせて読むと、吹雪の日の心細さ恐ろしさがせまってくる。それを「わが生れぐに」と詠むのは高野氏が指摘するように故郷への愛着であろう。

三首目は梅が咲いた自宅の庭に積る二月の雪を詠んでいる。東京では珍しく積るほどの雪だったらしい。「明日は止むとふ東京の雪」は何時まで止まないふるさとの豪雪を思い出させる。柵二が七一歳の時の作品である。半世紀東京に暮らしても柵二はふるさとを、ふるさとの雪を思い続けた。

最後に忘れてはいけない柵二のふるさとの歌を掲げる。  
ふるさととは影置く紫蘇も桑の木も一樣に寂し  
晩夏のひかり  
『多く夜の歌』

昭和三一年八月に堀之内町で開かれた小学校同窓会の一連の作品の中にある静寂感の漂う歌。ふるさとは「一樣に」とあるので影を置く何もかもが寂しいのだ。影の中にはふるさとを捨てる前の柵二の影があるのかもしれない。